

高群逸枝 (たかむれ・いつえ) 1894～1964

女性史研究家・詩人 ～夫と歩んだ火の国の女～

出生 1884(明治27)年1月18日、熊本県下益城郡豊川村南豊崎(現・松橋町寄田)に小学校長の長女として誕生。本名イツエ。田舎の豊かな自然の中で父に漢籍の手ほどきを受けて育つ。

履歴 熊本女学校4年修了(1913)、女工を経験した後、代用教員となる。限界を感じて退職、新聞記者を志すが失敗。四国巡礼に出発、九州日日新聞に「娘巡礼記」連載。橋本憲三と婚約、紆余曲折、死産も経験した後、新世帯をもって一時期家事と売文に追われたが、1928年頃から無政府主義者として盛んに論争。1931年、一転して研究生活に入り、夫の全面的な協力と平塚らいてうらの「高群逸枝著作後援会」に支えられて民間学者として女性史研究に打ち込んだ。

事績 詩人の才能を生田長江に認められ、『日月の上に』をはじめ多くの詩を世に出し評判となった。女性史研究家としての最初の成果は『大日本女性人名辞書』(1936)。膨大な文献を基に研究を続け、5巻構想の「大日本女性史」の第一、第二として『母系制の研究』(1938)、『招婿婚の研究』(1953)を刊行。後に『女性の歴史』(1954-8)をこの構想の通史部分にあてた。

評価 逸枝の研究開始の意味を鹿野政直は三点挙げている。日本初の本格的「女性史学」だった点。専門教育を受けない女性による「民間学」だった点。直輸入的性格を脱する「日本の学問」を目指した点。その後高群婚姻史は村上信彦らにより受容されたが、洞富雄、鷲見等曜らに誤りを指摘・批判され、更に栗原弘はそれが「女性のための歴史」を書く意図的な誤謬だったとする研究を発表。上野千鶴子はこれらを踏まえて歴史学の政治性についての教訓を引き出している。(参考文献参照)

代表作

『母系制の研究』 逸枝は、古代の系譜で同じ家名の者が別の祖先の名を持っている場合(一氏多祖)、全く別の家なのではなく、家が「母を中心として形成される親族制度」でありその家の代々の相続者の婿たちが各々の祖先を祖名として名乗っていたのだと考える。こうしたテーマは戦争に突き進む時代下で神秘的な皇国史観を植えつけたい当局にとって危険とされ、「母系制」をタイトルに持つ本書は同郷の徳富蘇峰(体制派)の序文により辛くも発禁を免れた。全集第1巻に収録。

『招婿婚の研究』 嫁取婚以前の婿取婚の存在を実証しようとした労作。全集第2～3巻に収録。

キーワード

婦人戦線 逸枝は弱者の解放のためには社会全体を変える必要があると考え、アナキストの立場で論争を重ねた。1930年3月、夫の勧めにより「第二の青鞥」として無産婦人芸術連盟の月刊誌「婦人戦線」を発刊したが、翌年6月に廃刊、7月に転居して「面会謝絶」の研究生活に入った。

E・ソート 夫婦関係を大きく変えたのが1925年の家出事件。新居に夫の仲間が次々押しかけ、家事、家計維持のための売文、夫の叱責に疲れた逸枝は家を出、保護された。以後夫は妻を支える生活を決意し、後年の研究生活は文字通り夫婦の協同作業となった。また、長時間の勉強で、服の窓側にあたるほうだけが日に焼けたというエピソード、仮説を組み直したことにより無意味な記述と気づいたとして2年にわたって採集した調査カードを全て破棄したエピソードも有名。

最期 1964年6月7日、癌性腹膜炎のため国立東京第二病院で死去。享年70歳。



Great Works 29

高群逸枝全集 全10巻 理論社 1966～1967年 <081.8 / 27>

解題 逸枝は第1巻の基礎作業段階で没したため、全体構成等は橋本憲三(夫)が決めた。未発表原稿も含めて取捨選択し公刊されたものも一部再編して収録。仕事が完結したら過去の文章は焼いてしまおうと言っていた「形なき彼女との対話を執拗にくり返しつつ」編集。「全集」だが、アナキスト

時代の論争、戦時中の皇国史観を示す文章など除かれた著作も多い。

内容

- 第1巻 = 母系制の研究 [恒星社厚生閣 1938年 大日本雄辯會講談社(講談社文庫) 1954年(新版)]
第2巻 = 招婿婚の研究1 [講談社 1953年 『大日本女性史』第2巻。本文1209ページの大著として刊行]
第3巻 = 招婿婚の研究2
第4巻 = 女性の歴史1 [講談社 上巻「女性中心の社会」 1954年 中巻(封建編)「性の牢獄」1955年]
第5巻 = 女性の歴史2 [講談社 下巻「解放のあけぼの」 1958年 続巻「労働婦人の世紀」1958年]
第6巻 = 日本婚姻史 / 恋愛論 日本婚姻史 [至文堂(日本歴史新書) 1963年 最終的な婚姻史観を提示]
恋愛論 [沙羅書房 1948年 「恋愛創生」と相補うもの]
第7巻 = 評論集・恋愛創生 恋愛創生 [万生閣 1926年 母子保障社会の主張(新女性主義)を一気に書いた全文章節をもたない論文] 女性史研究の立場から [求められて書いた女性史関係小論文の類と未発表の「平安鎌倉室町家族の研究一般公家篇はしがき」・「今昔物語集婚姻例表凡例」] 婦人戦線抄・ほか [「婦人戦線」掲載の時事評論・一般新聞や雑誌等掲載の同種の記事] 児童と道徳-国定修身教科書批判 [1927年ごろ 「教育の世紀」連載]
第8巻 = 全詩集・日月の上に 定本日月の上に < 長篇詩 > [新発表 『日月の上に』(「新小説」1921年4月号 叢文閣 1921年)の再刊を意図して1948年に圧縮・添削したもの] 放浪者の詩 [新潮社 1921年] 美想曲 [金星堂 1922年 1926年(普及版)] 月漸く昇れり < 長篇詩 > [「女人芸術」1929年1月号] 東京は熱病にかゝってゐる < 長篇詩 > [万生閣 1925年] 家出の詩 [1925年 『東京は...』に付載された詩] 妾薄命 < 歌集 > [金尾文淵堂 1922年 唯一の公刊歌集]
第9巻 = 小説 / 随筆 / 日記 黒い女 < 作品集 > [18篇の短編小説集(解放社 1930年)より、逸枝が親近者への寄贈用に削除した分を除いた14篇。便宜的に2篇を付載。] 巡礼行 [『私の生活と芸術』(京文社 1922年)に収録] 郁子より [「青春時代」連載 1921年 自伝的小説] 随筆 ・ [新聞雑誌等に掲載された身辺記録的・研究余滴風の随筆。多くは公刊された随筆集にも収録。] 路地裏の記 - 存在価値を見失った女性 [1924-1925年] 路地裏の記 [1926-1930年] 森の家日記 [1931-1964年]
第10巻 = 火の国の女の日記 [理論社 1965年 自伝。逸枝は執筆中に没、後半3部は夫が執筆]

参考文献 ~この人をもっと知るために~

< 図書 >

- 📖 高群逸枝の婚姻女性史像の研究 / 栗原弘著
高科書店 1994年 409,5,13p <385.4DD / 6> 資料番号20755252
- 📖 高群逸枝論 - 「母」のアルケオロジー / 山下悦子著
河出書房新社 1988年 243p <289.1 / 2529> 資料番号12365219
- 📖 高群逸枝(朝日選書 291) / 鹿野政直・堀場清子著
朝日新聞社 1985年 332p <289.1 / 1336a> 資料番号12359477
- 📖 森の家の巫女高群逸枝 / 西川祐子著
新潮社 1982年 233p <289.1 / 1917> 資料番号12360350
- 📖 わが高群逸枝 1・2 / 橋本憲三・堀場清子著
朝日新聞社 1981年 2冊 <289.1 / 1810> 資料番号12359568, 12359576
- 📖 高群逸枝論集 / 高群逸枝論集編集委員会編
高群逸枝論集編集委員会 1979年 267p <289.1 / 1712> 資料番号10537850
- 📖 娘巡礼記(朝日選書 128) / 高群逸枝著
朝日新聞社 1979年 270p <186.6K / 11> 資料番号10278976
- 📖 高群逸枝と柳田国男 / 村上信彦著
大和書房 1977年 230p <367.4H / 29> 資料番号11050267
- 📖 高群逸枝とポーヴォワール / 高良留美子著
亜紀書房 1976年 312p <367 / 103> 資料番号11045804

< 図書(部分) >

- 📖 高群逸枝をどう読むか / 上野千鶴子ほか著(ジェンダーと女性)
早稲田大学出版部 1997年 p205-260 <367.1FF / 5> 資料番号20960316